



## No.831 カニクイザルの下垂体

新日本科学

【動物】 カニクイザル，雌，年齢不詳。

【臨床事項】 本症例は，某薬物2週間経口投与毒性試験の投与終了時剖検のものである。投与期間中，同動物に特に著変はみられなかった。

【剖検所見】 剖検では，下垂体に嚢胞様物が見られ，その重量も正常の下垂体と比べて約2倍程度(167 mg)であった。なお，下垂体でみられた本病変は今回1例のみの発生であり，薬物投与との関連はないものと思われた。

【組織所見】 下垂体前葉と後葉組織の周囲に腫瘍が存在し，前葉組織内に浸潤増殖していた。

HE染色標本では，腫瘍は大小の担空胞細胞からなり，多形性の核が比較的多数集中している所には小空胞が密在した。また，エオジン好性の基質がみられ，それらの周囲には大きな空胞が配列し，核が散見された(図1)。PAS陽性顆粒が基質部分に多く，また少数の小空胞はAlcian blue微弱陽性を示した(図2，Alcian blue染色)。しかし，大多数の空胞は，PASおよびAlcian blue染色陰性であった。免疫染色の結果，担空胞細胞の核はPCNA強陽性で，増殖能亢進が示唆された。その他，S-100，GFAPに陽性，Vimentin陰性であった。本例では，残念ながら，下垂体全体をパラフィン包埋した為に，凍結切片脂肪染色および電子顕微鏡試料の作製が出来なかった。また，ルーチンの解剖の為に，腫瘍の原発部位などを確認出来なかった。

【診断】 カニクイザル下垂体の脂肪肉腫(宿題：脊索腫との類症鑑別を実施する)

【考察および討議事項】 発表後の質問で，脂肪染色の必要性を強調されたが，本例では材料が小さく遺憾ながら実施出来なかった。また，本例は脊索腫に酷似すると思われるという質問があった。組織形態学的に，ヒトの脂肪肉腫，軟骨肉腫および脊索腫は極めて類似しており，類症鑑別は容易でないと報告されている。討議の後，座長から再度検討する様に言われ宿題となった。文献にみる電子顕微鏡的研究報告では，脂肪肉腫には，種々の分化程度を示す脂肪芽細胞がみられる。また，脊索腫では，担空胞細胞にグリコゲン粒子に囲まれた大小不規則な空胞，粗面小胞体に囲まれたミトコンドリア(RER-ミトコンドリア複合体)，発達したゴルジ装置，微細管束を認め，デスモゾーム様細胞接着装置がよく発達していることが報告されている。従って，本例の最終診断には，戻し電顕による検索が決め手になると思われる。その電子顕微鏡的検索を実施し，新知見が得られたならば，再度報告をさせて頂きたい。(来原兄忠)